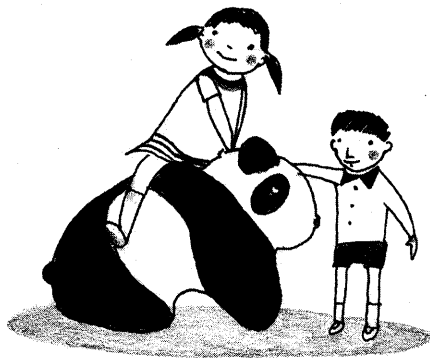


家庭での生活から

伊集院 理子



昨年三月に第二子を出産し、現在は一年の育児休業をいただいで、家庭で時を過ごしています。

横たわってただ泣き声をあげることしかできなかった息子も、今ではどこでもつかまって立ったり、気を引くものが目に入ると瞳を輝かせてものすごい勢いで這って行って、それを掴み、張ったり叩きあわせたり口に入れてみたりと、活発に動き回って物の探求に精を出しています。この世に生を受けて間もない幼な子の毎日は、まさに自らの可能性への飽くなき挑戦の日々です。

身体が少しねじれるようになれば、それを何度も試み、いつの日かはずみでコロッと寝返りが出来るようになります。一度できるようになると、すぐにはうまくできなくても何度も試みて、わずかの間に自分の力にしていきます。固く握りしめて少しも開こうとしなかった手もしだいにほぐれてきて、いつの日か、か弱いながらも握らせる

物を握れるようになります。その握り方が確かになるにしたがって、今度は自分から物に手をのばしてそれを操作しようとしています。いかなる時もある時にできる最大限の力を駆使して、運動機能にしろ、手指の操作にしろ、自分の可能性を拡げていきます。精神的、身体的に満たされている時は、一瞬たりとも無為に時を過ごすことなく自分から新しいことに挑んでいくのです。こうした生まれ間もない赤ん坊の全存在をかけて生きる姿、生きようとするエネルギー、生に対するひたむきさには心打たれるものがあります。誰もこの世に生を受けた時にはそうであったのに、いつからか、人は可能性を自分から縮めてしまうのでしょうか。

ふと、幼稚園で出会ったA子のことを思い出しました。入園当初のA子は、友だちのしていることを見て、自分から同じようにやってみようという姿勢が見られました。それまでの経験の少なさ

からか、製作的なことに対しては要領の悪い所がありました。自分なりに取りくもうとしていました。幼稚園での生活にも慣れてくると、自分から何かをしようとする能動性や躍動的な心の動きがあまり見られなくなっていました。ブランコにのったり、走りまわったりして何となく時を過ごすことが多くなりました。こちらができればみんなに体験してもらいたいと用意することに対しても、おざなりにちょっとやっつて、「これでいいですか」ともってることがありました。年長組になってからは、友だち遊びに興じる姿も見られるようになりましたが、ちょっとした友だちとのやりとりでメソメソしてしまつて、そこから立ち直るまでとても時間がかかりました。固定してきている友だち関係から一歩外に踏みだしたいという気持ちを持ちながら、自分から殻をつくつてしまつていようなどころがありました。そんなA子を見つめながら、彼女の自己を存分に生きてい

ないように思えて、歯がゆさと切なさを感じていました。

A子だけではなく、何もかにも心を囚われて、やりたいと思っただけに真つすぐ心を向けられずに、自分をありのままに生きられない子どもたちが多くなってきました。何故なのでしょう。

色々な事が早期化しているからでしょうか。今の子どもたちの多くは、幼稚園に入る前から、又幼稚園に通いながら、スイミングやスポーツ教室、幼児教育などに通っています。そこでは、きめられていることをやるように指示されます。そして決められたことをいかにこなしたかという、外からの基準で自分の行動をとられることを子どもたちは体験します。幼い頃から外からの基準で行動を評価されることを経験することは、子どもが自分なりにありのまま生きることに対して歯ごめをかけてしまっているのではないのでしょうか。又、親もそこでの評価に一喜一憂して、幼い

子どもを叱咤激励するようになっていきます。そして、子どものことをそこでの評価を介入させて見るようになっていきます。一番身近な大人である親がそうなったら、子どもはますますありのままに生きることができなくなってしまいます。

子どもが多くの時間を過ごす家庭生活には問題は無いでしょうか。

「早く食べなさい」「早く着かえなさい」「早く片づけなさい」毎日矢継ぎ早に繰り返される指示の言葉の嵐。ゆっくりと流れている子どもの時を、何だかいつも何かに追われているようなせわしない大人の時に無理矢理引きずりこませてはいないでしょうか。親の心づもり一つで生活の節目ともいえる時をもっとゆったりと過ごすこともできるのに、そのことは棚にあげて、「どうしてあなたはやるのが遅いの」「なんで言わなければやらないの」などと叱責したりしてしまうのです。我が家でも上の娘に対して毎日繰り返る

れる現実です。「言わなければやらない子」にしているのは親自身なのに……。

子どもが思いのままに何かに取りくむ時間が家庭生活の中にとだけあってしょうか。家の中には、子どもが興味を持っても触ってはいけない高性能、高品質なものであふれています。集合住宅では、心の高まりからはねたり走ったりするごく自然な子どもの行為も許されません。そういう様々な制約の中で、多くの時間をテレビやビデオの前で過ごすことが当たり前のことになってきています。テレビを見ている時の子どもは、ポカんと口をあけて全ての動きがとまってしまいます。十か月の息子でさえ、鮮やかに繰りひろげられる視覚刺激の前ではピタッと動きがとまってしまうのです。映像に引きずられるままになっている時の子どもは、自分をありのままに生きているとはとてもいえません。

この一年、家庭生活にどっぷりつかりながら、いかに家庭で子どもたちがありのままに生きずらくなっているかを切実に感じてきました。幼児期の子どもの日々は、瞳を輝かして新しいことにとんどん挑戦していく、生まれて間もない赤ん坊の毎日の延長であってほしいと心から願います。再び現場に戻る日が近づいた今、少なくとも幼稚園では、子どもが自分からやりたいことを見つけ、そのことに心を傾け、精一杯取りくむ中で、自分のありのままに生きていく本来の子どもの生活を取り戻すべく、出きる限りの援助をしていかなければいけないと、保育者として生きる重い責任をあらためて感じているところです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)